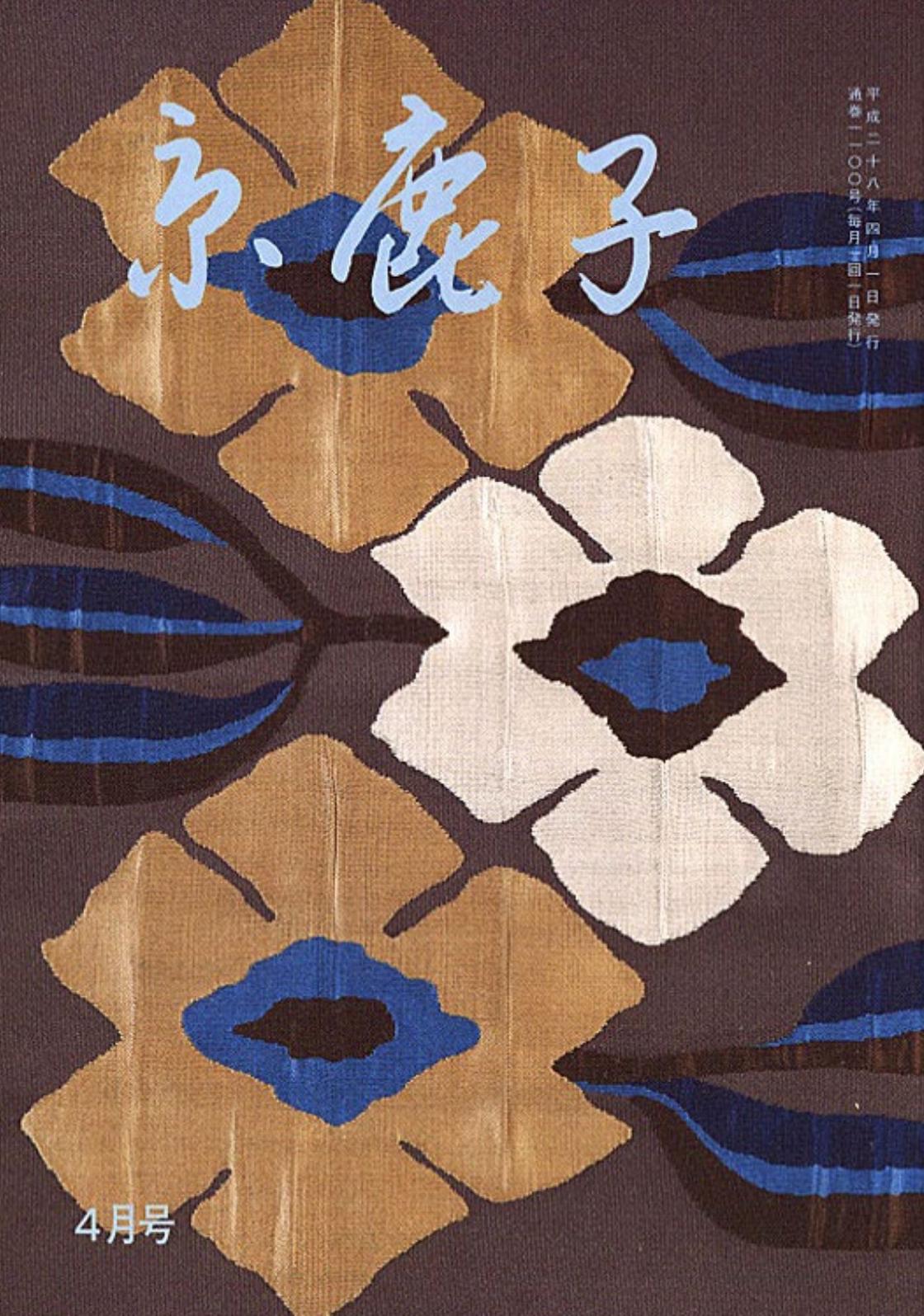


平成二十八年四月一日発行
通巻一〇〇号(毎月一回一日発行)

京鹿子



4月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その七

し ば ら く は 誤 解 の ま ま で は だ れ 雪

前 略 の 筆 を 遊 ば す 春 の 虹

花 種 蒔 く 振 子 の や う な 風 を 待 つ

ジ ャ ズ 流 れ 祇 園 四 条 に 春 の 月

ワ イン グ ラ ス に 君 ゐ ん ぬ 不 思 議 梅 月 夜

紅 梅 や 願 書 一 通 を 認 め る



薄氷の白切る素ぶり通ひ猫
季重なり一つあづける春告鳥
快速の停まる改札燕の巢
胞衣塚の宙かたくなに梅ひらく
初蝶の五線に惑ふ築地塀
嫡流は草の縁ゆかりに花の宮
提灯は東寺の二文字京の春
京みやこへの表看板春の塔

—近詠—

鈴鹿 仁

春の雪

追憶の白雲流す水仙忌

春の雪そのひとひらにある想ひ

うららかや風が背を押す仏みち

—追懐—(その二十)

細頸はをんなの器量つくしんぼ〔平成九年作〕

冬蝶に一念あるも愛は哀〔 〃 〕



— 近 詠 —

和田 照海

初昔

一 島 に 一 峰 あり て 初 御 空
島 に 嶋 重 ね て 伊 予 へ 初 凧 げ り
投 錨 の 音 の た だ よ ふ 初 昔
一 舟 も な き 大 灘 の 初 景 色
船 靈 に 座 り 正 し き 鏡 餅



松本 鷹根

遠会 積

里山の枯れの温みの遠会積

立ち話捉へて寒の日は沈む

寒林や木霊透かしに暮れ泥む

寒川の底に影置き橋渡る

マスト競ひ寒林立の船溜り

近 詠



塩貝 朱千

冬の 虹

あふみの海平ら水鳥長寝して

遠目よし菜の花乱れ咲きしより

からつぼの胸に抱かむ冬の虹

さよならは寒ばら活けし終着駅

これやこの神在り葱を買ひて吉

英華採集

ふくふくと冬木の奥に佛の眼

京都 菊池和子

冬木が凜然と構えている姿は、寒の厳しさにあっても人に勇気を与えてくれる。その冬木が春に向かう備えをしていると感じた作者は、冬木の中に仏の眼を捉える。その眼は、優しく慈悲に満ちた阿弥陀如来の眼差しに違いない。句の頭に置かれたF音の響きが心地よき安らぎへと読者を誘う。

柚子風呂や心の峠ひとつ越ゆ

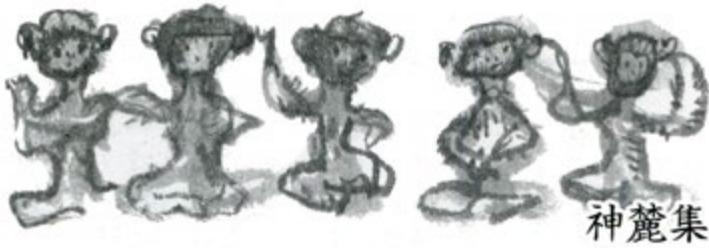
枚方 小川すみれ

人生に紆余曲折があっても平坦な道はない。譬え小事と雖も降りかかる火の粉は払わねばならない。日常の心の中に鬱積している物が心の峠である。そんな峠を一つ越えた作者を柚子風呂が優しく癒してくれて、明日に向かって生きる力を与えてくれることだろう。

一の目へ賽をころがす去年今年

和歌山 尾崎と代子

賽子を振り、出てくる目には偶発性があるので人がその数を期待する時、賭けの対象となる。しかし、大晦日に作者はその賽子を心の中で振っている。一の目が出るまで何度か何度も転がす。除夜の鐘が聞こえやつと一の目が出る。一の目に来る年の明るさを感じるのである。



風花 藤岡紫水
 一枚の賀状に命の印おおぎよし見し
 神寂びて罅も大仰鏡餅
 江戸小紋老いて着こなす小正月
 風花や女のひと生愛と哀
 寒椿一花に思ひ凝らしけり

月 籠 沼田巴字

雪祭白にはじまる夢夢夢
 透明になつていく人雪まつり
 風の中光の中や寒牡丹
 囀やアスパラガスを茹でてゐて
 月籠そのうち人は空に溶け

竜 神 丸井巴水

元旦と決め神苑のプロポーズ
 曇天が似合ふ葉牡丹絵筆持つ
 だまし釣許す竜神冬ぬくし
 万屋の餅花枝垂れ百歳女
 元旦も日暮れて浄土照らすなり

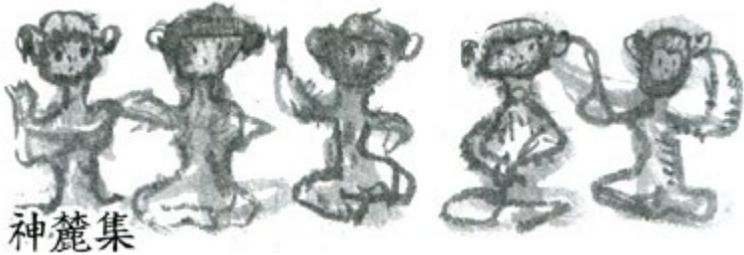
冬木の芽 伊藤希眸
 笙ひびく西山にもう雪来るか
 忘年の一語に締める古日記
 顔の被忘れてしまひ雪女郎
 枯葉どつと海境越えのむづかしき
 金縁の寺門に添うて冬木の芽

北川孝子

自問して自答にならず年惜しむ
 初比叡亡き人今日も濃くありぬ
 涙目か涙もろさか寒満月
 二日はやお目見え鳩の窓に寄る
 初風や身震ひひとつ賜りし

自 負 直江裕子

白菜の真ん中きれいな雨が降る
 ちり紙に咳を包んで自負すこし
 動かねば濁つてしまふ氷魚かな
 水に折れ水に傷つく冬の鷺
 この辺でたたら踏まねば真葛原



高木晶子

極月のせり出ししてくる食器棚
埋められぬ右に緋色のシクラメン
数へ日の壁に馴染みて犬矢来
蜀山の皿は紙なり熟柿食ふ
双竜の擱む初日の堂を出ず

冬の雲 木戸渥子

龍の目のつぶれて淡き冬の雲
一掬の個人情報越年す
恙なく体重ふえてみかん剥く
雪催機嫌のわるい膝がしら
雪女郎合切袋持ち歩き

奥田筆子

濡れ羽いろ平安貴族の初詣
助け舟小さく出して女正月
千枚漬静寂いちまいはがしけり
人ごとのやうに座つて実千両
極月や詰め込み一軒竣工す

井上菜摘子

落葉踏むふんではならぬものの音
名に拝と付けて終ふ文雪催
雪達磨うしろすがたは忘れたり
老ジャズマン階段のぼり風花へ
うつせみのまなこ滔々と十二月





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

ふくふくと冬木の奥に佛の眼

京都 菊池 和子

主婦であり女として居る初句会

寒の水ゆるりと生きるため咀嚼

水替へて水餅太き生命線

柚子風呂や心の峠ひとつ越ゆ

枚方 小川すみれ

小火遠し大路小路の張りつめる

七草過ぎ留守多くなる鍵の穴

青天に雲なし風なし寒ぬくし

一の目へ賽をころがす去年今年

和歌山 尾崎と代子

初硯心を零にするいとま

回礼の僧にこやかや護符を受く

初風呂や猿の親子の大欠伸

静けさや詩想ふつつ置炬燵

初硯くせ字一字の光満つ

初御空幸ふつつと我方へ

我家にも屠蘇酌む娘一人増え

短日や眺めひつそり暮れかかる

枯芝をリスかけめぐり蓄へを

窓の外枯木の森に入日かな

カサコソと内緒ばなしの落葉かな

アリゾナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

み佛の伏目見上げし煤払ひ

札 幌 野村 鞆枝

柚子皮をひとひら添へて故郷の味

書初めの半紙はみ出すきほひかな

ひ孫生れ婆の逝きたり去年今年

紅白に山茶花咲くや寺垣根

初霰窓打つ音に縮む首

冬木立見事片付け仕舞ひけり

雪晴れに輝く山の尾根なぞる

ブードルもサンタの衣裳散歩路

新米で傘寿寿ぐ握り飯

亡き友の話題は尽きず忘年会

孫の服買うて早脚師走路

雪婆ちひさき膝に来て果つる

冬萌ゆるいしぶみの歌読めずねる

松立たぬ門一条の初明り

雪深し閲覧室の静物画

ウエルカムコーヒー緋毛氈の宿暖し

感知灯心身晒す冬隣

忘年会ためらひつつもハイタツチ

喪歸りのカフエの小さき聖樹かな

葉牡丹植糸家の容をととのへり

リハビリや小春日和の植物園

松 戸 岡山 敦子

気忙しい火事のサイレン三の西

お庭仕事さくさくさくと冬ぬくし

冬天を引きつつ玻璃を拭きにけり

恵方へと傾ぐ湯けむり風の浜

心字池終の紅葉を沈ませて

兵馬俑かすかに香る春の彩

つひの間の片道切符日向ぼこ

短日のいそぎ取り込む介護服

短日や未練捨てさるときむかへ

少年の眼にもどりたき初鏡

加齢とは老化にあらず冬紅葉

手袋の左手ばかり残りたる

着膨れて着ぶくれの句を直しをり

風呂吹に銚子一本猪口ふたつ

冬日和川見るだけの散歩かな

木の葉髪肩に零れし髪一本

水漬を啜りて句誌を十時まで

忘年会二人羽織の箸迷ふ

古屋敷見守つてゐる実南天

枯れ菊を括れば覗く未練かな

寒林に寂の字型を重ねをり

異次元の結弦の妙技冬麗

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

金子 正道

東 京 野中 圭子

丹羽 武正